

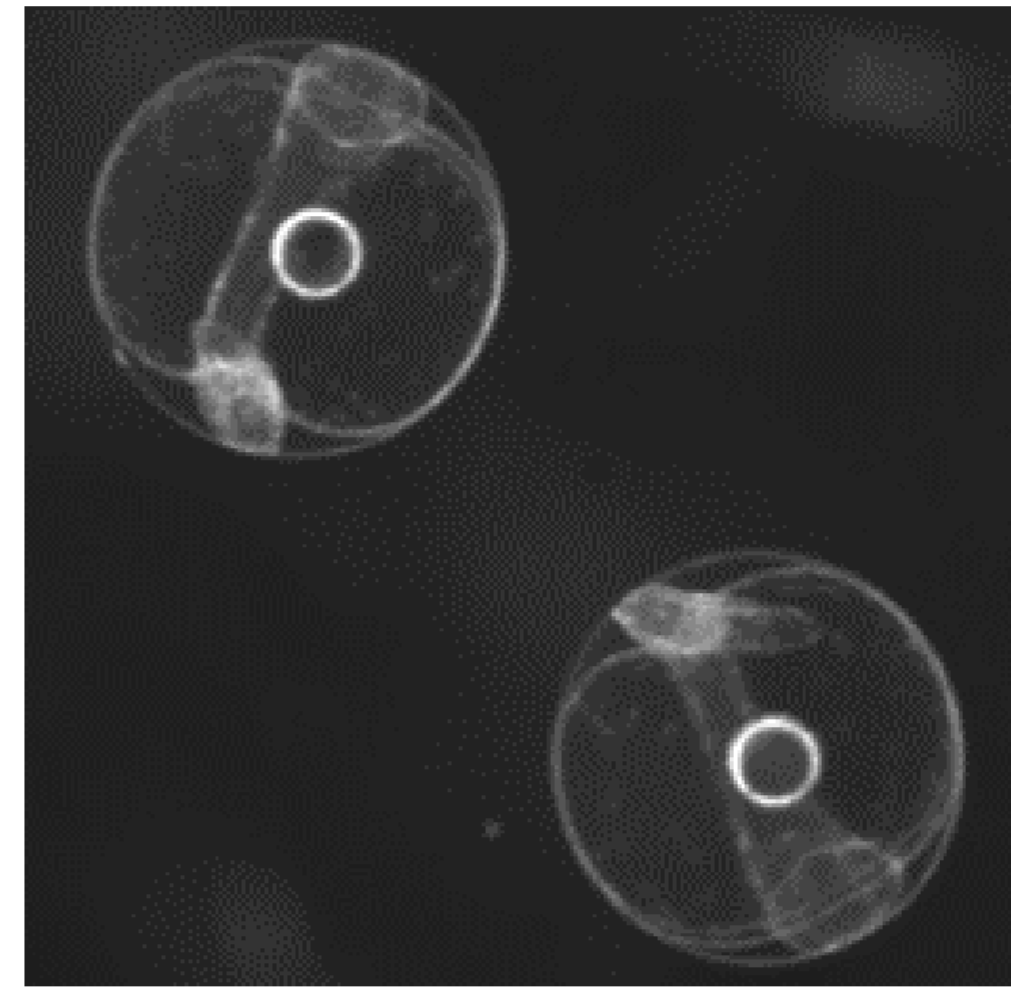
ヒラメ受精卵に与えるヨウ素剤の影響

1. 背景

異体類の種苗生産において、ウイルス性神経壊死症(VNN)やアクアレオウイルス感染症等のウイルス性疾病が大きな被害をもたらしており、その原因として親から卵、仔魚への垂直感染が疑われています。これらの疾病の対策としてヨウ素消毒によるVNNウイルスの不活性化が報告されており、生産現場に移転する場合に備え、ヨウ素消毒によるヒラメ受精卵への影響について確認する必要があります。そこで、ヨウ素剤の添加濃度や消毒時間がヒラメ受精卵の発生、ふ化に与える影響について試験しました。

2. 材料と方法

有効ヨウ素濃度50mg/L または100mg/L のヨウ素液に、10分間または15分間ヒラメ受精卵を浸漬しました。空白として濾過海水に15分間浸漬しました。消毒後、止水飼育をし、ふ化率と開口時生残率を求めました。



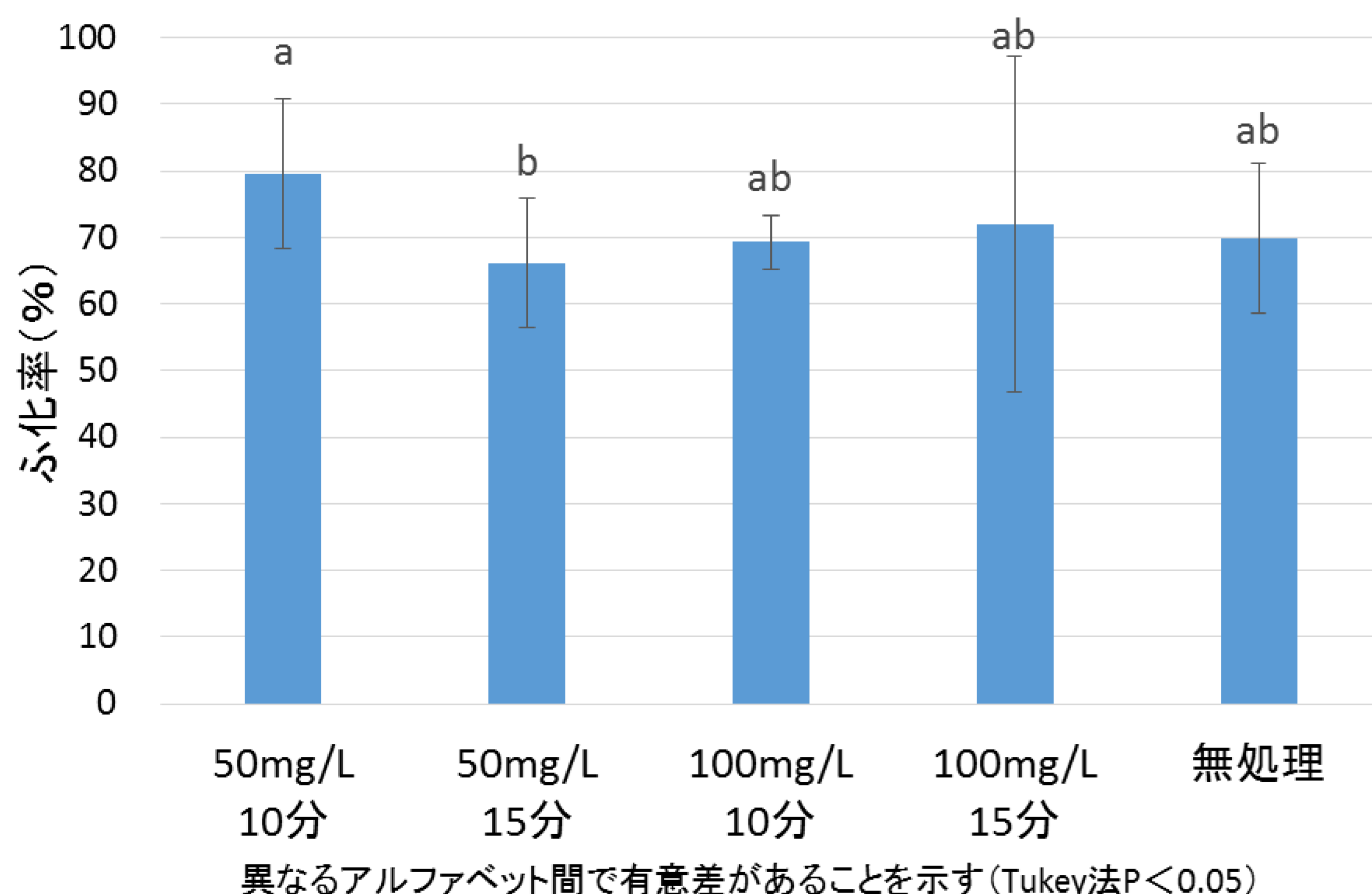
ヒラメ受精卵
(胚胎期)



受精卵の
ヨウ素液への浸漬

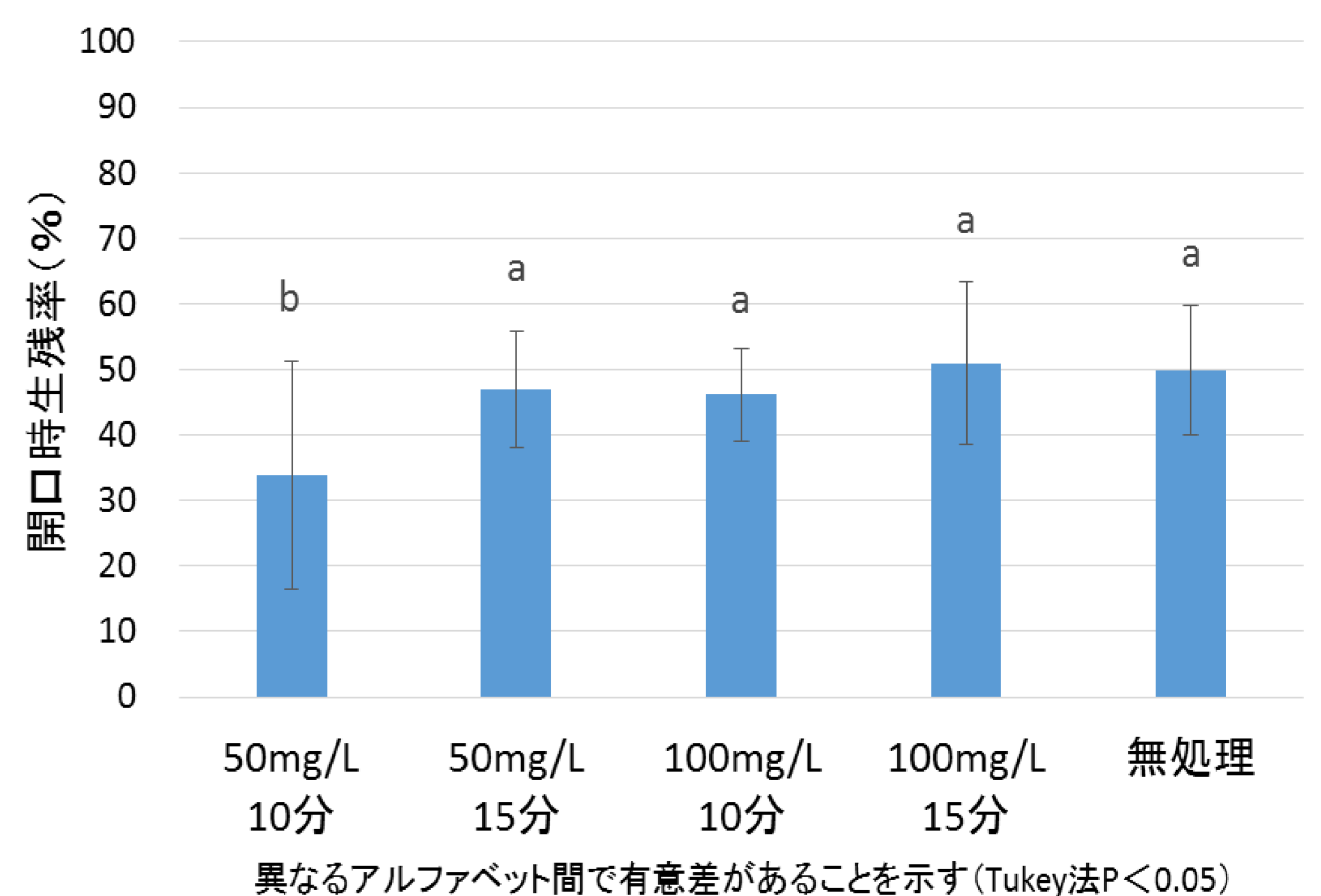
3. 結果

ふ化率



- 全ての濃度、浸漬時間区において、無処理区と差が認められなかったことから、100mg/Lに15分間まではふ化率に影響を与えないと考えられます。

開口時生残率



- ヨウ素液50mg/L×10分区が他区と比べて有意に低い結果となりましたが、それより高濃度・長時間の浸漬区において無処理区と差が認められなかったことから、100mg/Lに15分間までは開口時生残率に影響を与えないと考えられます。

4. まとめ

有効ヨウ素濃度100mg/Lに15分間浸漬する条件までは、ヒラメ受精卵(胚胎期)のふ化に影響なく利用できます。